ISSN 2187-1833

京都市学校歴史博物館研究紀要

第2号

目次

論文　京都番組小学校における唱歌教育の導入　和崎光太郎　(1)

研究ノート　平成 24（2012）年度における団体見学の現状と課題
小中秀則　車田秀樹　(13)

作品紹介　久保田米僊が描いた二つの遊戯図　―唐子と園児―　森光彦　(19)

平成 25(2013)年 6 月

京都市学校歴史博物館

京都番組小学校における唱歌教育の導入

和崎光太郎

はじめに

京都番組小学校とは、学制頒布以前の明治二（一八六九）年に全国に先駆けて開校した、上京・下京における六四の学区制小学校の通称である。各学校は学制頒布後の明治八（一八七五）年前後、公式名称の他に一種の雅号を用い始め、その雅号は明治一九（一八八六）年に小学校令が出された後にほとんどの学校で正式名称とされ、近年の統廃合で学校が閉校された後も「学区」の名称などに残る[一]。この番組小学校の創立過程や地域における役割については、研究の蓄積がある[二]。ただし、そこでどのような教育が展開されたのかについては、不明な点が多い。以上のことをふまえ本稿では、番組小学校における唱歌教育がいつ、どのような経緯をたどり導入されたのか、明らかにしたい。

なぜ唱歌教育なのか。周知のように、唱歌とは「歌う」ことを教える教科なのだが、この「歌」とは明治以前の「歌」とは根本的に異なっていた。すなわち、明治の小学校で取り組まれた唱歌教育とは、外来のメロディーに乗せられた「歌」を集団で唱和するというこれまで日本人が経験してこなかった身体動作を国家規模で国民に叩き込む壮大なプロジェクトであり、これは単なる知識の伝播ではなく、日本人の身体改造、教育を通した近代的身体の獲得という大掛かりなプロジェクトであった。

唱歌教育を意識レベルでの国民形成として把握するにとどまらず、身体レベルでの近代化・国民化として考察した研究は、「むすんでひらいて」を「国民身体改造」という視点から再考した安田寛[三]、国民形成の視点から唱歌遊戯を検討した渡辺裕[四]、唱歌帖の分析から日本語音声の標準化過程を追った平尾佳子[五]などによってすでに試みられている。しかし、この唱歌教育計画が壮大であればこそ、そうたやすく全国に浸透させることはできない。唱歌教育の普及が国家プロジェクト推進の結果と言えるのかどうか、あらためて問わねばならないだろう。唱歌教育が単なる知識の伝播以上の意味を持っているからこそ、唱歌教育の地域への浸透プロセスを解明することで、当時の各地域における教育のあり方に加え、教育情報がどのようなルートで流れ、どのような事情で教育環境が整えられていったのかが明らかになるのである[六]。

一　本稿では各校が雅号を用い始めた後も番組小学校と表記する。また、学制頒布後から小学校令後までの公式名称は公式文書以外ではあまり用いられていなかったので、本稿では雅号の校名で表記する。なお、本稿で論じる小学校はすべて番組小学校である。

二　辻ミチ子『町組と小学校』（角川書店、一九七七年）六六―一七一頁、石島庸男「京都番組小学校創出の郷学的意義」『講座　日本教育史　第二巻』（第一法規、一九八四年）二五〇―二七六頁、三上和夫『学区制度と住民の権利』（大月書店、一九八八年）八三―一五五頁など。

三　安田寛『「唱歌」という奇跡　十二の物語―賛美歌と近代化の間で』文春新書、二〇〇三年）一二―二六頁。

四　渡辺裕『歌う国民　唱歌、校歌、うたごえ』（中公新書、二〇一〇年）八〇―一一四頁。

五　平尾佳子「唱歌教育と日本語音声の標準化―明治の唱歌帖からみた教室の声―」大阪府立大学大学院人間社会学研究科『人間社会学研究集録』（八号、二〇一三年）一三三―一五三頁。

六　山住正己は『唱歌教育成立過程の研究』において、その残した課題の一つとして「唱歌教育の地方への普及過程を十分にあきらかにすることができなか

当然ながら、その教育情報伝達ルートや教育環境は、全国まとめて一般化できるものではない。明治という時代だからこそ、地域によって異なる実情があった。一方で、ある地域のルートや環境が閉鎖的・独自に発展してきたわけではない。番組小学校の場合では、京都府や中央政府、さらに同志社などの影響が少なからずあった。ゆえに、これらの外的環境を考察対象に含め、そもそも京都に唱歌が入ってくるのにはどのようなルートがあり、そのルートは具体的にどのような展開を見せたのか、小学校での唱歌教育のための必須教具オルガンはいつ・どのように番組小学校に導入されたのか、番組小学校での唱歌教育の教え手はいつ・どのように育成されたのか等を明らかにしていきたい。さらに、唱歌教育にはどのような困難があり、実際どのようなことが教えられていたのかも限られた資料から考察を試みたい。

一　唱歌の誕生　―明治九（一八七六）年～同一二（一八七九）年―

近代日本最初の学校法令である学制が頒布されたのは、明治五（一八七二）年のことであり、そこで早くも「唱歌」（以下、教科名の場合は「唱歌」と表記）が登場する。しかし、下等小学教科の最後に記された「唱歌」は「当分之ヲ欠ク」[七]とされ、具体的な教科内容も不明であった。また、ここでの「唱歌」が前近代の「しょうが」[八]なのか、西洋式の「しょうか」なのかは定かではない。

政府関係者で唱歌教育導入に向けて本格的に動き出したのは、学制頒布の四年後、明治九（一八七六）年にフィラデルフィア万国博覧会に出席した文部大輔田中不二麿だった。ただし田中は同年一二月に帰国する。現地で実質的な働きをしたのは開成学校（後の帝国大学）の留学生監督官として渡米していた目賀田種太郎と、師範学校調査のためアメリカに派遣されていた元愛知師範学校校長伊沢修二であり、中でも両者の主導で明治一〇（一八七七）年七月から翌月にかけて日本語の歌詞によるメーソンの音楽掛図が作成されたことは注目に値する。というのは、日本の唱歌教育の土台となったメーソンの掛図が日本語訳されたということは、日本への唱歌教育の導入が準備され始めたことを意味するからである。翌明治一一（一八七八）年三月には田中が東京大学（後の帝国大学）において小学校での唱歌教育開始の決意を披露している[九]。同年四月には、目賀田と伊沢の連名で田中に「学校唱歌ニ用フヘキ音楽取調ノ事業ニ着手スヘキ在米国目賀田種太郎、伊沢修二ノ見込書」が提出され、六月に帰国した伊沢が田中に「掛図雛形」を提出している[一〇]。以上のような経緯があり、明治一二（一八七九）年、文部省内に音楽取調掛（後の東京音楽学校）が創設された。すなわち、中央政府における唱歌教育導入は明治九（一八七六）年に始まり、その三年後の明治一二（一八七九）年には早くも音楽取調掛が創設されたのである。

一方京都では、学制頒布の三年前に六四の番組小学校が開校していたが、そ

った」（山住正己『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、一九六七年、八頁）としており、本稿は京都においてこの課題を達成するものでもある。

七　文部省内教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史　第一巻』（教育資料調査会、一九三八年）二八四頁。

八　ここでの「しょうが」の定義は、平尾佳子にならって「楽器で奏する旋律やリズムを音韻のつながりで唱える学習法」（平尾佳子前掲「唱歌教育と日本語音声の標準化―明治の唱歌帖からみた教室の声―」一三四頁）とする。

九　以上、明治九（一八七六）年以降の田中、目賀田、伊沢の働きについては、安田寛「京都と神戸ステーションの音楽教育史―アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史　その二―」『キリスト教社会問題研究』（四七号、一九九八年）四二―四八頁を参照。

一〇　ただしその裏では目賀田の働きがあった（安田寛「唱歌の起源―目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元―」山口芸術短期大学編『山口芸術短期大学研究紀要』第二九巻、一九九七年、一―一四頁）。この掛図は現存していないが、安田はこの論文において伊沢の報告書「唱歌法取調書」（明治一一（一八七八）年六月）などを手がかりにその復元を試みている。

の課業表に「唱歌」は入っていない。その後の明治一〇年代（一八七七―八六年）においても、唱歌教育が行われたことを示す資料は後述の本能小学校の事例を除いて確認できていない。しかし京都では、番組小学校以外の場において、明治一〇（一八七七）年前後から先進的な取り組みがなされていた。田中がフィラデルフィア万国博覧会に出席した明治九（一八七六）年、すでに京都ホーム（翌年、同志社女学校と命名）でドーン宣教師によるメーソンの掛図を用いた音楽教育が始まっており、翌明治一〇（一八七七）年三月には京都ホームにオルガンが到着している[一二]。ここでの音楽教育の詳細は明らかではないが、メーソンの掛図等を用いていることから日本語ではなく英語で音楽教育がなされていることは確実であり、歌われた曲も賛美歌が中心であったと思われる[一三]。当時はまだ同志社という閉じた世界での教育と理解すべきだが、以上のことから同志社女学校は京都への最初の唱歌教育導入ルートと位置づけられるだろう。

京都ホームにオルガンが到着した明治一〇（一八七七）年三月、同年同月に作成された京都女学校[一三]給費生規則第十二条において、「体操遊歩の時間」のうち週三時間が「絃歌」にあてられ、「正雅ノ曲ヲエラビ教ヘテ気血ヲ和シ淑徳ヲ養フ」と指導内容・目的が記されている[一四]。「体操遊歩の時間」に琴などの弦楽器を弾きながら歌う「絃歌」が含まれていることは、「唱歌」誕生以前から音楽教育が身体形成として考えられていたことを意味する。同年一二月に出された京都女学校英学普通科のカリキュラムには、早くも「唱歌」が確認できる[一五]。カリキュラムに掲載されていることを根拠に実際に唱歌教育がなされていたと考えるのは早計だが、翌明治一一（一八七八）年一〇月には日本最初の唱歌教科書である京都府女学校編『唱歌』が出版され、翌明治一二年九月には京都府学務課の役人が同志社女学校の音楽教育を視察していることからも[一六]、この頃には京都女学校において何らかの形で唱歌教育が行われたこと、そして少なくとも京都府学務課が唱歌教育導入に積極的であったことがわかる。

以上のように、明治一〇（一八七七）年前後は中央政府と京都においてそれぞれの唱歌教育導入の動きが確認できる。しかし、中央ではまだようやく音楽取調掛が創設されたところであり、京都では同志社女学校・京都女学校という限られた学校での取組みだった。

二　唱歌教育の黎明　―明治一三（一八八〇）年～同一九（一八八六）年―

唱歌という全く新しいジャンルを教えるためには、それを教え得る教師と教材が揃わなければならない。明治一二（一八七九）年時点での状況をおおまかにまとめれば、中央では教師育成と教材作成の準備がようやく整ったところであり、京都では女学校という場において教師・教材がある程度揃っていたが小学校にまでは展開されていなかったということになる。すなわち、明治一〇年代初頭（一八七〇年代末）において、小学校での唱歌教育は、限られた一部の地域において何らかの形で行われていたかもしれないが、そのような例外的な

一二　安田寛前掲「京都と神戸ステーションの音楽教育史―アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史　その二―」三〇―五七頁。

一三　坂本清音「草創期（一八七六―一九〇〇年）同志社女学校の音楽教育」『同志社論叢』（一八号、一九九八年）六七―七六頁を参照。

一三　京都女学校は、明治五（一八七二）年に新英学校及女紅場として創設され、明治九（一八七六年）年に京都女学校及女紅場と改称された際に女学校は学務課、女紅場は勧業課の管轄と明確に分けられた。後の明治一五（一八八二）年に女紅場が廃止され、京都女学校は京都府女学校と改称される。以上、小山静子「高等女学校教育」本山幸彦編『京都府会と教育政策』（日本図書センター、一九九〇年）三〇三―三〇八頁を参照。

一四　「京都女学校給費生規則の布達」『京都府百年の資料　五　教育編』（一九七二年）一九四―一九七頁。

一五　京都府女学校「京都府女学校英学普通科教則」（明治十年十二月改正）（徳重文書）。

一六　「文部省御達留」より「同志社視察之記　第三回」（明治十一年九月）（徳重文書）。

ケースを除いてはまだ日の目を見てはいなかったのである。このことは、明治一四（一八八一）年五月に出された文部省達第十二号「小学校教則綱領」第二条において、いまだ「唱歌」は「但唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ」[一七]という扱いで課業表から省かれていたことからもわかる。このような状況だからこそ、小学校用唱歌教科書の発行が急がれたのだろう。音楽取調掛が設置された年の翌明治一三（一八八〇）年、メーソンが来日し、唱歌教科書の作成が本格化する。その元になったのは、目賀田の尽力によって作成され伊沢がアメリカから持ち帰ってきた「掛図雛形」（前述）であり、明治一五（一八八二）年に音楽取調掛編『小学唱歌集　初編』が出版される[一八]。明治一六（一八八三）年に同第二編、明治一七（一八八四）年に同第三編が出版され、明治一九（一八八六）年の小学校令で近代小学校制度の基礎が固められた後、明治二四（一八九一）年の文部省令第十一号「小学校教則大綱」第十条に至り、ようやく「唱歌ハ耳及発声器ヲ練習シテ容易キ歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ兼ネテ音楽ノ美ヲ弁知セシメ徳性ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス」[一九]と指導内容・目的が明記された。ただし、この法令は「尋常小学校ノ教科ニ唱歌ヲ加フルトキハ通常譜表ヲ用ヒシテ容易キ単音唱歌ヲ授クヘシ」[二〇]と続いている。「唱歌ヲ加フルトキハ」という但し書きがあることから全小学校でただちに唱歌を教えることは現実的に不可能だと認識されていたこと、生徒には楽譜を読ませず、和音を用いずに単音での唱歌に徹底することが定められたことがわかる。

このように、明治一三（一八八〇）年から同二四（一八九一）年にかけて文部省の唱歌教育導入政策が進展したのだが、その過程で唱歌教育導入における京都と中央との結びつきが生まれる。その嚆矢は、明治一五（一八八二）年、京都府女学校の教員三吉艾（おさむ）と伊藤よねが音楽取調掛で伝習を受け始めたことにある[二一]。この伝習は翌年七月に終了、成果はすぐに現れ、同年九月に京都府女学校で特別唱歌専門伝習が開始された[二二]。また、詳しい期間は不明だが、同時期に三吉は本能小学校（下京、現中京区）においていち早く唱歌教育を実践したとされる[二三]。

京都府女学校での伝習がどれほど小学校教員による唱歌教育を可能にしたかは定かではないが、伝習が開始された三年後、大きな追い風が吹く。明治一九（一八八六）年の小学校令公布にともなって小学校教員の単科免許状が補正され、裁縫科の女教員が職を失うという問題が発生したのである。三吉はその受皿として唱歌科教員の育成を提案し、自ら主催者となって明倫小学校（下京、現中京区）において同年七月八日から九月一八日まで婦人唱歌研究会を開催した。指導者は三吉の他、京都府女学校師範科で伊藤よねに学んだ赤松藤枝を補助講師とし、オルガンは京都盲唖院のオルガンを借入れて使用、入会者は一〇五名だった[二四]。閉会後には、「小学唱歌ノ普及ヲ図」ることを目的とした京

一七　文部省『学制百年史　資料編』（帝国地方行政学会、一九七二年）八一頁。

一八　『小学唱歌集　初編』の成立過程については、安田寛前掲「唱歌の起源―目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元―」一―一四頁、山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』七九―一一八頁を参照。

一九　教育史編纂会編修『明治以降教育制度発達史　第三巻』（竜吟社、一九三八年）一〇〇頁。

二〇　教育史編纂会編修前掲『明治以降教育制度発達史　第三巻』一〇〇頁。

二一　ただし伝習の開始は明治一六（一八八三）年初頭の可能性もある。両者の伝習については、山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』一五二―一五三頁、一五七―一五八、丸山彩「明治一〇年代～二〇年代の京都府女学校・京都府高等女学校における音楽教育の展開」日本音楽教育学会『音楽教育学』（四一巻二号、二〇一一年）一五―一六頁を参照。

二二　丸山彩前掲「明治一〇年代～二〇年代の京都府女学校・京都府高等女学校における音楽教育の展開」一六頁。

二三　吉田恒三編『京都音楽史』（京都音楽協会、一九四二年）三頁。なお、市制が明治二二（一八八九）年に施行されるまでは番組小学校は府学務課の管轄だった。京都府の教育政策及び市制施行後の府と市の教育政策については、小股憲明「明治期京都府の教育政策」本山幸彦編前掲『京都府会と教育政策』一二七―二〇四頁を参照。

二四　以上、婦人唱歌研究会については『京都教育会雑誌』（九号、一八八六年

都婦人唱歌会が結成され[二五]、「六拾円を抛（なげう―引用者注）ち楽器一台を購入」[二六]している。

婦人唱歌研究会開催の意義は、唱歌教員の育成だけではなく、「唱歌流行ノ気運」[二七]を起こしたことにあった。例えば、同研究会に刺激されて明治一九（一八八六年）末には上京区小学校長会内にも唱歌研究会が結成され[二八]、翌明治二〇（一八八七）年二月からは龍池小学校（上京、現中京区）に同志社からグリーン夫人が招かれ小学校教員向けの音楽の伝習が行われている[二九]。同月には京都婦人唱歌会メンバーが弥栄小学校（下京、現東山区）で開催された京都教員協会第一回総会において会員入場後に「唱歌奏楽」を実演し[三〇]、さらに同月の京都博覧会への天皇行幸に際してはオルガン伴奏にあわせて合唱している[三一]。オルガンの伴奏で合唱を披露するというのは当時としてはまだ珍しいことであり[三二]、これらの事例は当時京都が唱歌教育先進地のひとつになっていたことを物語っている。また、高等小学校ではすでに唱歌教育が行われていたようであり、明治二〇（一八八七）年一一月に文部大臣森有礼が下京区高等小学校を巡視した際、最初の授業が二年生・三年生女子の「唱歌」となっている[三三]。では、尋常小学校（現在の小学一年から四年にあたる）において唱歌教育はいつ・どのように始動したのだろうか。

三　唱歌教育の始動　―明治二〇（一八八七）年～同二八（一八九五）年―

（一）唱歌教育のための環境整備

尋常小学校における唱歌教育導入を考えるにあたって、明治一九（一八八六）年の婦人唱歌研究会開催はとても重要な転機になっている。前述したように同研究会終了後には各種イベントで唱歌が披露されるようになり、これは唱歌という近代の産物が市井に認知されていったことを意味する。この「唱歌流行ノ気運」は、当然ながら尋常小学校における唱歌導入を後押しした。

具体的には、明倫校の近隣学校において唱歌教育のための環境整備が整えられていく。明治二〇（一八八七）年一〇月には教員と学区民が構成する生祥教育会が生祥尋常小学校（下京、現中京区）にオルガンを購入し[三四]、日彰尋常小学校（下京、現中京区）ではドイツ製オルガンを大阪から購入している（資料①）[三五]。翌月には開智尋常小学校（下京、現下京区）（学区民が六〇円の

八月）七一―七二頁、『京都教育会雑誌』（一一号、一八八六年一〇月）七二―七二頁、『京都府教育雑誌』（八七号、一八九九年七月）二二―二三頁を参照。盲亜院のオルガン（京都府立盲学校に現存）については、赤井励『復刊選書一オルガンの文化史』（青弓社、二〇〇六年）三八―三九頁を参照されたい。

二五　『京都教育会雑誌』（一三号、一八八六年一二月）六二―六三頁。なお、以後の会場は明倫校とは限らなくなる。

二六　『京都府教育雑誌』（八七号、一八九九年七月）二三頁。「台」という単位と値段から、おそらくオルガンだろう。後にさらに二台購入している。

二七　『京都教育会雑誌』（一一号、一八八六年一〇月）七二頁。

二八　『京都教育会雑誌』（一一号、一八八六年一〇月）七二頁、『京都教育会雑誌』（一四号、一八八七年一月）七二頁。

二九　『京都教育会雑誌』（一五号、一八八七年二月）五七頁。

三〇　『京都教育会雑誌』（一六号、一八八七年三月）四七頁。

三一　丸山彩「京都における唱歌会の活動―明治二〇年前後の女子教員と『唱歌』―」音楽教育史学会編『音楽教育史研究』（二二号、二〇〇九年）九九頁。

三二　山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』二八頁。

三三　『京都教育会雑誌』（二四号、一八八七年一一月）四一―四二頁。

三四　『京都教育会雑誌』（二三号、一八八七年一〇月）五一頁。

三五　関口秀範「聞見録」京都市役所編『京都小学五十年誌』（京都市役所、一九一八年）三五五頁、日彰百年誌編集委員会編『日彰百年史』（一九七一年）扉絵解説。関口は『京都小学五十年誌』編纂時の日彰尋常小学校校長。後年、この購入が「市内小学校で風琴を買入れた一番か二番であったと記憶する」と語られている（関口秀範前掲「聞見録」三五五頁）。なお、京都府教育会『京都府教育史　上』（京都府教育会、一九四〇年）五九〇頁ではこのオルガンの購入が明倫尋常小学校となっているが、この部分の記述は明らかに「聞見録」に拠っているにもかかわらずこの箇所だけ「日彰」が「明倫」となっていること、さらに明倫校関連の史料から当時オルガンを購入した記録が見出せないこ

和製オルガンを寄贈しており[三六]、婦人唱歌研究会が開催された一年後の明治二〇（一八八七）年一〇月から、下京の限られた小学校ではあるがオルガンが備えられ始めたことがわかる。一方教科書は、修徳尋常小学校（下京、現下京区）で用いられていた明治二一（一八八八）年七月八日発行の大和田建樹・奥好義編『明治唱歌　第一集　三版』（東京）が、番組小学校で使われた現存最古の唱歌教科書として遺っている[三七]。

さらに、カリキュラムの面でも大きな前進が見られる。明治一九（一八八六）年の文部省令第八号「小学校ノ学科及其程度」[三八]に基づいた明治二〇（一八八七）年の府令第三十一号「小学校学科及其程度実施方法」第六条において、「尋常小学校ニ於テ土地ノ情況ニ因リ図画唱歌ノ一科若クハ二科ヲ加フルトキハ左ノ程度ニ従ヒ他ノ学科ノ時間ヲ減シ之ニ充ツヘシ此場合ニ於テハ加設ノ学科ヲ具シ当庁ヘ開申スヘシ（中略）唱歌　単音唱歌」[三九]とされており、「土地ノ情況ニ因リ」という留保は前年の文部省令そのままなのだが、文部省令では「単音唱歌複音唱歌」とされているところが、京都府令では単音唱歌に限ることが明記された。後に明治二四（一八九一）年の文部省令第十一号「小学校教則大綱」において教育内容が単音唱歌に限られる（前述）ことを考えれば、京都府の方が唱歌教育の現状をより正確に把握していたと言える。また、あわせて京都府から出された「尋常小学科授業時間配当準拠表」には、「唱歌ヲ加フル学校ニ於テハ其時間ハ体操科ノ内ヨリ月水金曜日ハ二十分火木曜日ハ四十分ヲ取テ之ニ充ツルモノトス」[四〇]とあり、京都府においては唱歌教育があいかわらず体操教育、すなわち身体形成の範疇にあったことがよくわかる。使用教科書は、英語科・唱歌科・習字科の教科書を定めた明治二〇（一八八七）年の甲第三十号[四一]において、『小学唱歌集』の初編・二編・三編とされている。このように、婦人唱歌研究会の開催とその後の「唱歌流行ノ気運」は、番組小学校への唱歌教育導入を強く後押ししたのである。

では、番組小学校において始動した唱歌教育の内容は、どのようなものだったのだろうか。当時はまだ「唱歌帖」など児童の学習の痕跡を示す教材が用いられておらず、教育内容を示す同時代に書かれた資料は『京都教育会雑誌』のわずかな論考を除いて確認できていない。また、音楽取調掛編『小学唱歌集』はその内容が当時の小学校現場になじまず不評であり[四二]、それが広く普及していたからといって実際教育現場でどの程度使用されたのかはわからない。『小学唱歌集』に寄せられた批判に応えて伊沢修二編『小学唱歌』が出版されたのは、明治二五（一八九二）年である[四三]。ゆえにここでは、前掲の大和田建樹・奥好義編『明治唱歌　第一集　三版』に見られる特徴と当時の時代的状況から考察してみよう。

その奥付によると、出版から二ヶ月で三版が出ており、版数からは広く普及していたことがうかがえる。また、『京都音楽史』において、「明治二十年の頃より漸く諸種の唱歌集は刊行され、殊に明治二十一年五月大和田建樹・奥好義によって出版された明治唱歌四冊の如き実に古今の名曲を集めたものであった」[四四]と評価されていることから、京都においても広く用いられていたと考えられる。

曲目は、全二九曲中、大和田の作歌が二〇曲あり、作曲は奥作曲が六曲、作

とから、『京都府教育史　上』の「明倫」は「日彰」の誤植だと考えられる。

三六　『京都教育会雑誌』（二四号、一八八七年一一月）三九頁。

三七　京都市学校歴史博物館管理。なお、明治一八（一八八五）年版の文部省編『小学唱歌集　初編　第三版』（一八八五年、初版は一八八一年）が京都市学校歴史博物館に現存するが、どの学校で用いられていたのかは不明。

三八　以下、同令については教育史編纂会編修前掲『明治以降教育制度発達史第三巻』三八―四一頁を参照。

三九　京都市小学校創立三十年紀念会編『京都小学三十年史』（一九〇二年）三六五―三六六頁。

四〇　京都市小学校創立三十年紀念会編前掲『京都小学三十年史』三七三頁。

四一　京都市小学校創立三十年紀念会編前掲『京都小学三十年史』三七四頁。

四二　山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』二五三―二五五頁。

四三　山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』二九九頁。

四四　吉田恒三編前掲『京都音楽史』五頁。

曲者無記名で「西洋大家の歌曲集より選べる」曲が一三曲あり、この選定者は編者の奥だろう。つまり、全体の三分の二が大和田と奥の手になる曲ということになる。選曲は、「春の歌」「鳥の歌」という花鳥風月を歌ったものから、「勤学の歌」「皇国の守」という教育的意図が露骨に表れた曲まで幅広く、「君が代」は収録されていない。特徴的なのは、天皇を崇める「天長節」とキリストを崇める「クリストマスの歌」が同じページに併記されていることだろう（資料②）。時はまだ「祝日大祭日唱歌」が選定される明治二六（一八九三）年の五年前、明治二一（一八八八）年であり、だからこそ、比較的自由度の高い選曲と配置が可能だったのだろう。この唱歌教科書には「天長節」の他に「紀元節」も収録されているのだが、どちらも「祝日大祭日唱歌」における「天長節」「紀元節」とはまったく別の曲である[四五]。

（二）唱歌教育の困難と実態

しかし、この教科書には大きな問題点があった。すべての曲が五線譜で書かれており、数字譜が一切用いられていないのである。当時はまだ五線譜を読むことができる教師はごく少数であり、数字譜も普及していなかったので、どちらにせよ研究会などで特別な教育を受けていなければ教員は楽譜から曲を読み取ることはできなかった。教科書があってもそれを使うことができないという場面が多々あったであろうことは想像がつく。

楽譜を読めたとしても、それを演奏する楽器がなかった。明治二〇年代初頭（一八八〇年代末）はまだオルガンが国内で量産化されておらず、購入できたとしても非常に高価なものに限られたからである。確かに、前述のように明治二〇（一八八七）年末には少なくとも生祥校・日彰校・開智校がオルガンを備えており、翌明治二一（一八八八）年に大阪の四代目三木佐助が本格的にオルガンの販売を開始しているので、この頃には番組小学校にオルガンが導入され始めていたかもしれない[四六]。しかし、京都では明治三〇（一八九七）年頃にようやく村上勘兵衛[四七]がヤマハ製オルガンを販売していたとされ[四八]、京都の楽器販売会社の老舗、十字屋田中商店（現 JEUGIA）が東京十字屋から独立したのは明治三一（一八九八）年である[四九]。明治二〇年代（一八八七―一八九六年）に京都でオルガンを購入できたとしたら、村上勘兵衛か東京十字屋[五〇]がすでに販売していたという可能性以外は考えられない。しかも、購入した場合はかなりの高価である。ゆえに、明治二〇年代に番組小学校でオルガンを購入できたのは前述の三校の他は少数にとどまったと考えるのが妥当だろう。当時の様子を知る関口秀範は後年、「風琴の購入が容易ではないので児童の教授は多く笏拍子が用ひられた」[五一]と記している。ただし、番組小学校では大

四五　この教科書における「天長節」は大和田建樹作歌、上真行作曲。「紀元節」は下田うた子作歌、奥好義作曲。

四六　全国的にも明治二〇（一八八七）年末から翌年にかけて、限られた小学校にではあるがオルガンが導入され始めたとされる。ただし国産オルガンが全国に普及するのは、明治三〇年代（一八九七―一九〇六年）を待たねばならない（赤井励前掲『復刊選書一　オルガンの文化史』三九―五〇頁、三五〇―五二頁）。

四七　明治二一（一八八九）年の番組小学校創設当時から京都（東洞院三条上ル）で教科書・教具などを多数販売していた御用書店。

四八　吉田恒三編前掲『京都音楽史』五頁。

四九　明治四三（一九一〇）年に日彰学区出身の一宮道子（後の日本女子大学教授・作曲家）から日彰幼稚園に寄贈されたヤマハ製燭台付風琴（京都市学校歴史博物館管理）は、十字屋で購入されている（現物確認）。一宮については、長尾智絵「一宮道子の生い立ちと京都時代の音楽教育」日本女子大学編『日本女子大学大学院紀要　家政学研究科・人間生活学研究科』（一九号、二〇一三年）一七―二四頁を参照されたい。

五〇　JEUGIA の公式創立年は明治三一（一八九八）年だが、明治二九（一八九六）年には京都で営業していたようである（吉田恒三編前掲『京都音楽史』一五頁）。

五一　関口秀範前掲「聞見録」三五五頁。なお、京都市開智尋常小学校『開智』

正後期にスタインウェイなど高価な外国製ピアノが各地で寄贈されており、オルガンも前述の開智校のように学区民からの寄贈によって全国に先駆けて明治二〇年代に備わっていた学校が少なからずあった可能性もある。

唱歌のメロディーを児童に聴かせる手段は、オルガンとピアノだけではない。当時はまだレコードのような蓄音機は存在しなかったが、蓄音機の原型とも言うべき器具があった。紙腔琴（しこうきん）という、穿穴ロール紙を巻いてリードを響かせる演奏器具である。明治二〇（一八八七）年頃から徐々に広がり、国産オルガンが急速に普及した明治三〇年代（一八九七―一九〇六年）の末には衰退したとされるが、この紙腔琴が短期間ながら小学校や家庭において広く用いられたであろうことは、すでに金子が明らかにしている（資料③）[五二]。問題は、紙腔琴が番組小学校においてどれほど用いられたのか、である。学校関連資料においては、紙腔琴を使用したことに関する記述を発見できていない。ただし、明治二六（一八九三）年八月にはすでに販売元の東京十字屋が「偽せ物御要心」の広告を出し[五三]、曲譜目録に三四曲の唱歌が収められ[五四]、村上勘兵衛（前述）が京都で紙腔琴を販売していることからも[五五]、明治二〇年代後半（一八九二―九六年）には紙腔琴及びその類似品は全国の少なくとも都市部の学校では使われており、番組小学校においても使われ始めていたと考えられる。

（駸々堂出版部、一九四〇年）一二頁にも同様の記述があるが、文面からこの記述は関口秀範前掲「聞見録」三五五頁を参照して書かれたと考えられる。前述のように、開智校には当時すでにオルガンが備えられていた。

五二　金子敦子「紙腔琴の歴史」お茶の水女子大学編『お茶の水音楽論集』（特別号、二〇〇六年）二五三―二六六頁。

五三　倉田繁太郎編『紙腔琴の栞』（十字屋音楽部、一八九三年）六〇頁。

五四　倉田繁太郎編前掲『紙腔琴の栞』七〇―七一頁。

五五　他に北は北海道から南は鹿児島まで、京都を含めて全国計一七ヶ所で販売されている（倉田繁太郎編前掲『紙腔琴の栞』巻末の広告）。また、通信販売で購入する場合は曲譜を三円以上注文すると送料が無料となっている（倉田繁太郎編前掲『紙腔琴の栞』巻末の謹言）。

唱歌教育導入における困難は、ヒト・モノ以外にもあった。そもそも日本人には、メロディーに乗せて歌詞を歌うという習慣がなかった上に、当時の唱歌はキリスト教との結びつきが強くイメージされていた。例えば、先に述べた明治一九（一八八六）年の婦人唱歌研究会に対しては、「世人或は艾（三吉艾―引用者注）に一の野心ありて婦人を集めて娯楽を為すと言ひ或は営利を目的として斯る事業を起せりと誹り或はキリスト教を伝播するものと疑ふ等種々の攻撃を受け」[五六]たと記録されている。教会で歌われていた賛美歌と同研究会で歌われた唱歌は、今日ではイメージしづらい程に似ても似つかないものであっただろうが[五七]、多人数が集まり大声を出して歌うという風習がなかった日本において両者が同一視されるのは、無理もないだろう。

では、唱歌教育が行われた教室内はどのような状況だったのだろうか。明治二四（一八九一）年の京都教育会（本部は京都府師範学校内）会員による報告では、市内では「現今ニテハ本科ヲ設置セザルノ学校ナク」とされており、これは当時すでにほとんどの番組小学校で唱歌教育が行われていたことを示唆する。ただしその教育内容は惨憺たるものだと報告されている。すなわち、「父兄」は「学校ノ唱歌夫レ何ノ効カアル只愛児ノ咽喉ヲ傷フノ害アルノミ宜シク之ヲ全廃シテ以テ有用ナル読書算術智字等ヲ精錬スベシ」と言い、教室では児童が「或ハ立チ或ハ坐シ或ハ高談シ或ハ相争闘シ或ハ啼（な―引用者注）クモアリ或ハ笑フアリ或ハ怒ルアリ」という状態、しかも教師の歌唱力は「蛙鳴蝉噪」というありさまだという。この会員は、だからこそ唱歌会のより一層活発な活動が必要だと述べるのだが[五八]、この報告は唱歌教育そのものへの理解不

五六　『京都府教育雑誌』（八七号、一八九九年七月）二二頁。。

五七　明治後期における日本人の「歌声」獲得過程については、嶋田由美・小川容子・安田寛「洋楽導入による異文化適応としての日本人の歌声の変化」和歌山大学編『和歌山大学教育学部紀要　人文科学』（五六号、二〇〇六年）一七―二三頁を参照。

五八　以上、ＳＴ生「唱歌科教授ニ付テ」『京都教育会雑誌』（六一号、一八九一年）二九―三一頁。

足と教師不足という、当時の唱歌教育をとりまく困難を如実に物語っている。

以上、当時はまだ唱歌を学ぶことの意味がなかなか理解されず、唱歌教育が市民権を得たとは言えない状況だった。これは、児童と親にとどまらず、教師にとっても同様である。ゆえに、唱歌教育が学校に定着するためには、唱歌そのものの意味ではなく、他に必要性が生じねばならなかった。

四　唱歌教育の定着　―明治二九（一八九六）年～同三四（一九〇一）年―

それを象徴的に表しているのが、オルガンを売るための広告文である。明治二九（一八九六）年に出版された『新編　教育唱歌集』を見ると、その巻末にある三木楽器のオルガン広告の見出しが「祝祭日儀式用楽器」「教育唱歌軍歌用楽器」となっている（資料④）。つまりオルガンは、祝祭日儀式を祝うための楽器、教育唱歌（地理や読本を歌にしたもの）と軍歌を歌うための楽器であり、学校用オルガンと一心同体の唱歌もそれ自体が目的ではなく、あくまで儀式の効果を最大限引き出す（つまり国民・臣民意識の培養）ため、または地理などの学習内容を定着させるための手段であった。当時は日清戦争の経験を通して日本人に「国民」意識が急速に定着しつつあり、当時の京都の様子は後に「二十七八年の戦役に軍歌及び軍歌集続出し為めに洛陽の紙価を高らしめるものがあった」[五九]とまで表現されている。日清戦争がもたらした軍歌の氾濫と「国民」意識の高揚は、京都も例外ではなかったのである。

ただし、このような全国的な動向とは別に、京都では尋常小学校に唱歌教育を定着させた独自の動きがあった。一つは、明治三一（一八九八）年一月に完成した、市歌「京都」[六〇]である。この市歌の最たる特徴は、京都市小学校長会の決議によって誕生し、同校長会が講習会を開くなどして普及させたという点にある。作歌は国学者の黒川真頼、作曲は東京音楽学校教授上真行に依頼された本格的な唱歌であり、曲の狙いが「児童ヲシテ愛郷心ヲ勃興セシメ」ることに置かれた「教育原理ニ遵由（じゅんゆう＝従う―引用者注）」する「郷歌」として、きわめて教育的な意図を持って作成された。活用方法は「朝ハ之ヲ歌曲ニ唱ヘ夕ハ之ヲ音楽ニ聴キ知ラス識ラズ怡然（いぜん＝喜びながら―引用者注）愉快ノ裏ニ之（愛郷心―引用者注）ヲ鼓舞スル」とされており、その狙いが唱歌を手段とした愛郷教育・愛国教育であったことがわかる[六一]。この事実は、唱歌が教育の手段としてより重視され始めたということに加え、学校という近代化装置とその長である小学校長によって「皆で歌う」という風習が教育現場から市井へと拡大され始めたことを意味する。この歌が単に尋常小学校の教授用にとどまらなかったことは、単音だけではなく復音（和音）が用いられていることからもわかる（資料⑤）。前章で論じたような唱歌教育の「困難」がまだ残存していたと考えられる当時、唱歌が郷土歌として校外に出たことは、唱歌教育が市民権を得るにあたって重要な意義を持つ。また、市歌「京都」は管見の限りでは全国初の本格的な郷土歌である。かつて嶋田は、明治三五（一九〇二）年末における大阪の同様の事例を「社会の中の音楽と小学校唱歌教育がいち早く密接に結びつけられた例」と論じたが、京都はそれを四年あまり先行していたと言える[六二]。

以上のように、日清戦争後には番組小学校において唱歌教育が定着しつつあったと言えるが、その定着を決定的にしたのが、教育唱歌と郷土唱歌をミックスさせた『京都地理唱歌』（村上勘兵衛、一九〇〇年）と『京都歴史唱歌』（村

五九　吉田恒三編前掲『京都音楽史』五頁。

六〇　京都の市歌はその後、明治三九（一九〇六）年、大正四（一九一五）年に作成されているが、いずれも公式な市歌ではない。現在の市歌（公式）は昭和二六（一九五一）年に作成されたもの。

六一　以上、『京都府教育雑誌』（七〇号、一八九八年二月）二五―二六頁を参照、引用。

六二　嶋田由美「郷土地理唱歌の隆盛と小学校唱歌教育―明治年間出版の郷土地理唱歌の分析を通して―」日本音楽教育学会編『音楽教育学』（二四巻三号、一九九四年）一八頁。ただし、大阪市の場合は『大阪朝日新聞』による懸賞募集によって歌詞が制定されるなど細かい事情が異なっており、京都市の場合と単純に同一視はできない。

上勘兵衛、一九〇一年）の登場である。

ただし、両唱歌が誕生した背景には、京都だけではなく全国規模での事情があった。大ベストセラー『地理教育　鉄道唱歌　第一集』（以下『鉄道唱歌』と略）の発行である。明治三三（一九〇〇）年五月に大阪三木佐助によって発行され、その直後から飛ぶように売れた同書は、瞬く間に全国各地にその郷土版を派生させた[六三]。京都においても当時の状況が、「唱歌（鉄道唱歌―引用者注）が大阪市三木佐助書店より四六半分版の冊子発行さるゝや、先づ之をブラスバンドを以て京都市中に宣伝し遂に全国至る所に普く宣伝せられたと称せられ、遂に此の形式の唱歌書が濫造された」[六四]と語られている。この積極的な「宣伝」は、単に『鉄道唱歌』を売るためだけになされたのではない。同書の内表紙の裏には、楽譜を差し置いて「山葉製風琴」「鈴木製ヴァイオリン」「楽器隊用楽器」の三木楽器による販売広告が掲載されており、奥付の次ページにはオルガンとヴァイオリンの絵、その下に三木楽器のカタログ無料進呈の広告が掲載されている[六五]。すなわち、『鉄道唱歌』を流行させれば自社の広告を兼ねることができ、さらに唱歌を演奏するための楽器も売れる（その筆頭としてオルガンがあった）という発想のもと、積極的な営業戦略によって『鉄道唱歌』は広まったのである。

『鉄道唱歌』発行直後に編纂された『京都地理唱歌』『京都歴史唱歌』は、いずれも作歌が京都府師範学校訓導岩内誠一、作曲が京都府師範学校助教諭楠美恩三郎である。岩内は明治三三（一九〇〇）年に京都で発足した関西文庫協会の会員であり、明治三五（一九〇二）年五月に生祥尋常小学校長として全国に先駆けて学校文庫を設置[六六]するなど京都市教育界で活躍した人物である。楠美は市歌「京都」の講習会の講師を務めるなど市教育界と関わりが深く[六七]、後の第二期国定教科書『尋常小学唱歌』編纂のメンバーとして知られる。両唱歌は『鉄道唱歌』と同じく七・五調の馴染みやすい単音メロディーで構成され、『鉄道唱歌』が全六六番なのに対して『京都地理唱歌』は全四〇番と若干少なめだが『京都歴史唱歌』は全六二番あり、縦横のサイズは両書ともに『鉄道唱歌』と全く同じ、表紙と本文のデザインも瓜二つ、値段も同じ六銭、巻末広告にオルガンの絵付広告が掲載され広告主が出版元というところまで共通する。つまり、両唱歌が『鉄道唱歌』の影響によって作成されたことは間違いない[六八]。

ただし、すべてが『鉄道唱歌』の類似というわけではない。まず、『鉄道唱歌』には数字譜がなく、曲が上真行作曲と多梅稚作曲の二パターン掲載されている。一方で『京都地理唱歌』『京都歴史唱歌』には数字譜が付けられ（資料⑥）、曲は楠美作曲の一パターンのみである。これは、教育現場で使いやすく、かつ混乱しないよう配慮がなされてのことだろう。また、岩内による『京都地理唱歌』の緒言には「こは我京都市の児童の為めに諷唱（ふうしょう―引用者注）の際に郷土地誌の梗概（きょうがい―引用者注）を知らしめんとて作りたるものなり」[六九]、『京都歴史唱歌』の緒言には「本書につきての補助は前編と

六三　嶋田由美前掲「郷土地理唱歌の隆盛と小学校唱歌教育―明治年間出版の郷土地理唱歌の分析を通して―」一六―一八頁を参照。

六四　吉田恒三編前掲『京都音楽史』七頁。

六五　大和田建樹『地理教育　鉄道唱歌　第一集』（三木佐助、一九〇〇年）内表紙の裏、奥付の次頁。

六六　生祥校の児童文庫については、木村稔「児童文庫の誕生　―明治期における京都市小学校の歩みをたどりながら―」渡辺信一先生古稀記念論文集編集委員会編『生涯学習時代における学校図書館パワー　―渡辺信一先生古稀記念論文集―』（日本図書館協会、二〇〇五年）二九九―三一三頁を参照。

六七　『京都府教育雑誌』（七〇号、一八九八年二月）二六頁。

六八　問題は、それがいかなる影響なのかである。本稿の射程はあくまで京都市なので詳しく検討することはしないが、全国的に『鉄道唱歌』類似本が大量派生した要因には、単に教育者が唱歌の教育的効果を狙ったということだけでなく、楽器販売所によるしたたかな営業戦略があったのではなかろうか。同時代がオルガンなどの楽器販売の拡大期であったこと、そしてそれとともに唱歌が広く定着したことを考慮に入れなければならない。

六九　前掲『京都地理唱歌』緒言。

異るなし」[七〇]とあり、教育的効果を狙っていることは明確である（ちなみに『鉄道唱歌』ではこの緒言の部分が広告になっている）。

以上のように、明治三一（一八九八）年には教育界発の市歌「京都」が誕生し、さらにその二年後には『京都地理唱歌』『京都歴史唱歌』が相次いで製作された。前者は唱歌が学校外に出て市民権を得るための切り札、後者は学校現場における格好の唱歌定着ツールであったと考えられることから、番組小学校における唱歌教育は明治三〇年代前半（一八八七―一九〇一年）において定着したと言えるだろう。

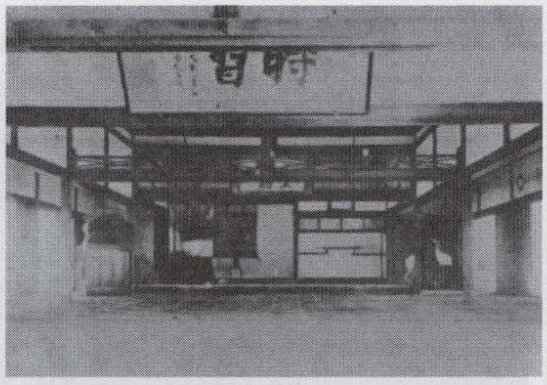
おわりに

以上、番組小学校における唱歌教育がいつ、どのような経緯をたどり導入されたのか、考察してきた。最後にこれまで述べてきたことをまとめておきたい。

京都における唱歌教育導入ルートは、明治一〇（一八七七）年前後においては京都ホーム（後の同志社女学校）および京都女学校（後の京都府女学校）のみであった。同時期は中央でも唱歌制定に向けてようやく動き始めた頃である。小学校での唱歌教育導入にあたって京都と中央との結びつきが生まれ、その活動が進展したのは、明治一六（一八八三）年に京都府女学校の教員が音楽取調掛での伝習を終えてからである。伝習の成果はすぐに発揮され、特に明治一九（一八八六）年の婦人唱歌研究会開催は、番組小学校への唱歌教育導入の大きな転機となった。明治二〇（一八八七）年には簡易なカリキュラムが整備され、番組小学校における唱歌教育が始動する。しかしそこには、教え手不足と楽器不足、加えて唱歌を教育することの意味がいまだ市民権を得ていないという困難がともなっていた。それらの困難を乗り越え、番組小学校において唱歌教育が定着したのは、日清戦争後の明治二九（一八九六）年から同三四（一九〇一）年にかけてであった。

本稿の意義は、京都番組小学校における唱歌教育に射程を定め、唱歌教育に必要な情報がどのような伝達ルートで流れ、どのようにして教育の環境が整えられていったのかを歴史的に明らかにした点にある。京都番組小学校における唱歌教育の導入は単なる国家プロジェクト推進の結果ではなかった。「上からの」唱歌教育普及以前に同志社女学校及び京都女学校での唱歌教育と府学務課の働きがあり、かつ婦人唱歌研究会という京都独特の動きや、全国に先駆けての本格的なオリジナル唱歌の作成があった。他方では、楽器販売業者の巧みな営業戦略も唱歌教育導入の推進力となっていた。京都では以上のような複合的な要素によって、唱歌教育が小学校に導入されていったのである。

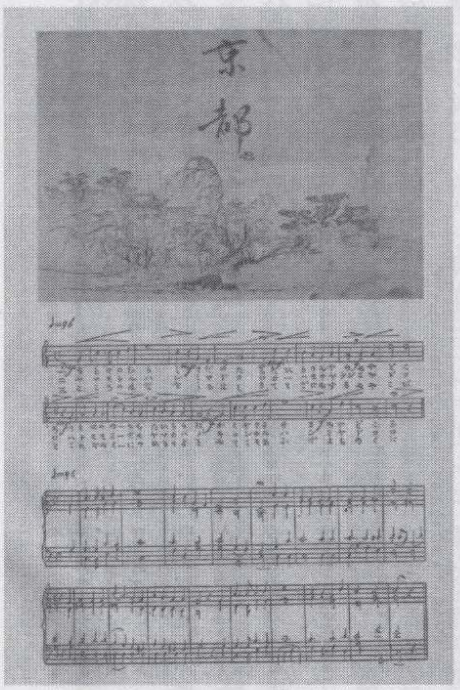
ただし、今回扱った資料は明治期の番組小学校についてのすべてではない。各学校関連資料は未整理のものが多く残っている。これらの資料に基づいた考察と、唱歌教育導入における他地域との比較検討、番組小学校の歴史における唱歌教育導入の位置づけなどについては、今後の課題としたい。



資料①
日彰校の講堂。撮影年不明。左にオルガンが写っている。（『日彰百年史』扉絵）

資料②
「天長節」と「クリストマスの歌」

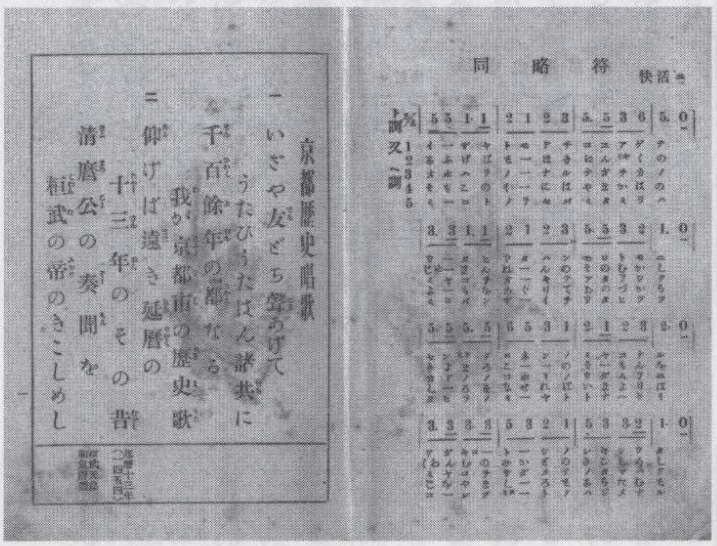
七〇　前掲『京都歴史唱歌』緒言。

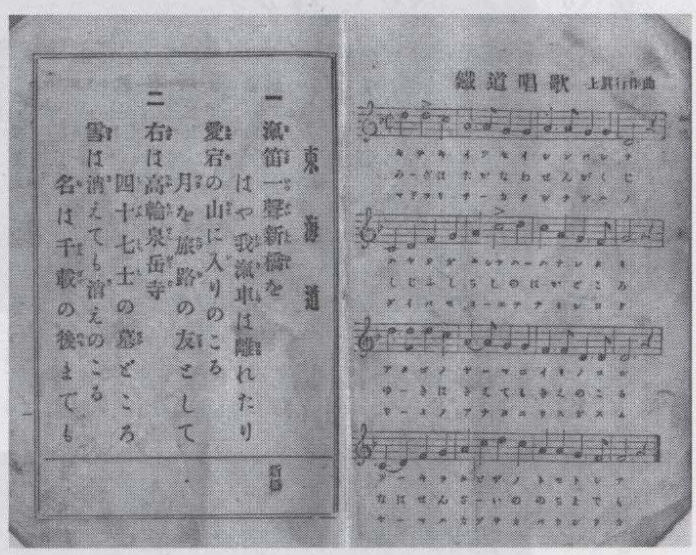


資料⑤
市歌「京都」（『京都音楽史』６頁）

資料④
三木書店楽器部の広告

資料③
紙腔琴の広告。上にはアコーディオン、右にはヴァイオリンの広告もある。（『新編　教育唱歌集』1896年）





資料⑥
右が『鉄道唱歌』、左が『京都歴史唱歌』。